

三鴨山の歌について

新里宝三

三鴨山の歌は万葉集に出て来る「下毛野みかもの山の小櫓のすまぐはし児ろは誰が筈か持たむ（三四二四）」である。歌全体としては平易な方であつて難解な所もなきさうであるが、一応一二の点について眺めることにしよう。

その第一に出てくるのは「ろ」の接辞が東歌に多いことである。東歌のなかで「児ろ」の使用が三三五一から三五六五までの間に十二例がある。「子ろ」も同じ内容で三四七三と三五〇九。更に「夫（せ）ろ」の場合が三三七五と三五四八で外に心象「心の緒ろ」三四六六が出て来る。山に因んだものには「嶺ろ」が三三七〇外四例「山辺ろ」が三三三三、「尾ろ」が三四六八。地名についたものに「伊香保ろ」が三四〇九外四例、「小管ろ」が三五六四に出ておる。このように東歌には「ろ」の接辞が多いがこれは鴻巣氏の万葉集全釈で説明している東語に口にいふ接尾語が多く用ゐられた」で説明が十分であろう。新村出氏の辞苑では「意味なく口調のために添へる語」としている。

また「小櫓のす」の「如す」という使い方も現代では見当らない用法であるが、この例は三五四八木屑の依す「如（な）す」の変北で現在「の如く」の意味であり三五五四に高き峰に雲の著く如す。三五二五野に鴨の匍ほ如す。三五四一駒の如く如す。三五五二我が思ほ如すも。三五六一雨を待と如す、の如く疑問の余地はないようである。

第二には「たがけか持たむ」の「け」であるが、これは略解に、「たがけかは、高々に歟といふに同じく、ふりあふぎ望む意、もたんは将待（またん）也」とあるのは首肯し難い。古義には大神真朝説の筈を持つことは妻となることに随つていふようであるが、今日の通説ともなつており、無難だと思われる。佐々木信綱氏の正訓万葉集では「誰が食（け）か持たむ」とされていふが筈は食を入れるもので同義となる。岩波の古典文学大系では筈は食物を盛る筈、家の假名を使うのは違例と註している。要するにこの歌は庶民の歌であり、略奪婚の見える筑波に近い関東辺地のことであつてみれば當時「誰それ家」と格式張つたものではなくて食器であつたとする所に自然さがあるようだ。筈は食器だけでない例は東歌の中に三四八四麻笥の例や日本書記の櫛笥（崇神天皇の条）の例もあるように種々の容器に用いられたものであろう。

第三には「小櫓」であるが宣長のいう「こならのすは高くの序也こならは木櫓也」は当たらない。小櫓は大櫓、真櫓の六七丈も高い櫓の木に比較して高さ三四丈の別種小櫓を指すもので現地には大櫓もたまにはあるが大部分は小櫓である。外観は殆んど変わらないのであるがよく見れば小櫓には優美さがある。殊に小櫓の大きいのを新用にとつた後に芽生えた小櫓原の水々しい美しさは乙女姿に称えても不思議ではない。特に春先の灌木風景がいゝようだ。その外には「小を接辞としたり、木と解する場合に、當時果して大女が喜ばれ

たであろうかが疑問」になつて来る。防人達の歌に出て来る妻恋の面から考へても大まかな女が親しまれたとは思われないのである。

小楯は一名ならはのき、のほそ、は、そなどと呼ばれ (*Crataegus Gandulferi, Blume*) 日本博物研究会の全植物図鑑によれば「温帯なる地方の山林に最も普通なる落葉喬木で高さ三四丈に達し外皮は甚だ粗である。葉は倒卵形で長さ二三寸に達し、縁辺に粗々内向せる粗鋸歯を有し、下面には帯白色の柔毛密生して固る。花は単性で鐘蓋同様に生じ雄花は長い穂状花序に排列し、雌花は杯状の総苞を具へて固る。果実は楕円形で鱗片細小なる杯状の殻斗を有す」とあるが、林檎の円さ赤さが乙女の顔を想わせるように、この小楯のの実は可憐さも一駄早乙女に通ずるものはあるようだ。小楯を古義は「楯の若木」としているが現地を見ての感じではやはり「小楯」確属と疑たい。

第四には三鴨の地名についてであるが略解に「美は発音にて、加茂山か、加茂といふ所国々にあれば也」とあるがこれは現地に接しない人の一つの考え方に過ぎない。三鴨山は現在は町村合併で安藤の地佐野市と、都賀の地岩舟町と藤河町が峯を中心に境を分つている。大略三峯からなつており高さが北都峯が二二三m(山頂まで七八丁)南都峯が二〇九・八mで中峯はそれより低い。倭名抄には三鴨郷とあり延喜式に三鴨駅となつている。古くは足利駅と三鴨駅の間に天明宿(佐野)があつたが移には佐野が中心になつて三鴨が附随した形に變つた。三鴨の間は移に三香保岡又は三香保岡というようになまつた。この地に慶隆という所があつて慈覚大師誕生の地として碑なども建つてあるが壬生町の方では大師の出生地は壬生だと争つてゐる。三代実録には「貞観六年正月延曆寺座主、伝燈大法師位内任卒、田仁姓壬生氏、下野国都賀郡人也」とあつてこれでは決め手にならない。

右 北方から眺めた二鴨山



左 小楯林



三鶴山は一名大田和山（麓の部落名から）とも呼ばれている。延喜式内蔵寮式に「篋十枚下野国所産」とある所から、三鶴は三鶴山から三鶴山、更に三鶴山の字を充てたと称されている。髭は倭名抄に「髭母、毛髭、糸為髭」とあつて岡毛地区の織物髭即ちこの地を起点として関係があるようだ。兎に角三鶴山は賀茂山でなく現在の三鶴山であることは間違いない。一説に岩舟山を三鶴山と称したかも知れないと地名辞典が附りとして書いてあるが取るに足らない附説である。

此処で三鶴山をめぐる交通路について少し調べて見よう。一つは水路である。古語拾遺にあるように斎部氏は四国の阿波から千葉の安房に渡り間々田に安房神社を作つた当時から利根川が交通の中心となつて渡良瀬川を経由したのが佐野足利頼生を通じて所謂渡良瀬文化を醸成させたのであつたが、その起点が三鶴になつている。一方利根川から三鶴の北辺を経て家の八島、下野国府、栃木に達するのが巴波（ウズマ）川の舟便であつた。

陸路の方も三鶴山を中にして二手に分れる。一つは上州路で佐野に通ずる道で越名沼、鎌倉権五郎の愛馬を葬つた鎌塚、因分寺瓦を焼いた黒袴の山瀬、土鍋の出土してゐる大伏を経て佐野に通ずる道で一つは早くから官道とも見られ旧例警使街道でもあつた道で大田和部落は鎌倉九代後記に出て来る古戦場であり万葉の碑のある三鶴神社（山上の奥宮は今も焼失している）登山道のある下津原を経由して岩舟小野寺栃木にいたる道で水禄四年十一月二十二日には上杉謙信が小山攻略の前日この山麓に泊つてゐる。

こうしたように何れの道を通つたにしろ長い麓側東の大平原を経て来たものが此処で始めて山に突き当るのである。然も庶民的な観しみを持たせる「なだらかさ」を持つ三鶴山の展開である。こうした感心あるものは必ず一言作らなければならぬ地理的な仕組みにな



三 香 保 岡 筋

つてゐる。続いて安蘇山の歌が次々に詠まれることも自然と言わなければならぬ。今三鴨を詠んだ古歌三首をあげて見よう。

越えゆかむことは愛けれどよそ目にて三鴨の

山は面白きかな

藤原春村

水鳥の三鴨の山に咲く花の浪間かきわけゆく

橘守近

下野の三鴨の山に来てみれば小なら真白に雪

戸田茂睦

ぞ降りける
更に三香保関を拳げると

石ふまぬあその川原に行きくれて三香保の崎

蓮生法師

に今日やとまらむ
我こふる妹がみかほのこなたにも人目の関の

安部光枝

あるがわびしさ
草枕日を経ていとどくろみたる三香保の関も

僧正慈観

秋風ぞ吹く

などがあるが、これらの歌でわかるように「皆麓から眺めた歌」で山自体に登つたものではない。其処に古い三鴨山の特徴があつた。言い換えれば中の峯を中心にした山道は交通路ではなかつたということである。また上州から水戸に通ずる新しい国道は山を遠く離れているので麓の一周はハイヤーでは通れない小道、ジープでもなければ駄目である。私は佐野市からジープを出して貰つて辛うじて人丸神社などの古蹟を訪ねたり、武島御歌所寄人の書いた万葉の歌碑などを見ることが出来た。小さいようでも山は山であり、観光化されていらない所だけに無茶は禁物であることをつくづく感じさせられた。全くこの山を登るなら落葉してからの冬に限るのであつて、昔の人達の旅情から来る遠望詠の実際を知ることが出来たのが一つの収穫であつた。

△在康誌 V

上代文学

通卷第十四号

鹿持雅澄にかかわる家系

—「白札勤役年譜帳」を中心に—

鴻巣隼雄

人麿署名歌における異伝

篠塚昌宏

年に稀なる神

—東歌の研究—

桜井満

昭和三十七年上代文学研究論文要旨

中西進

辛四〇〇